東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

今日的課題を含む授業における授業形態による効果の違いと意識変容についての考察：家庭科実習に対して生徒が抱く嗜好とコロナ禍における本実践への印象との比較

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-08-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 桒原, 智美, 大塚, 啓太, 鈴木, みゆき, 岡田, 和美, 村上, 恭子, 前田, 稔, 藤野, 加奈子, 朝蔭, 恵美子, 青山, ひなよ, 郭, 詩抬, 杉森, 伸吉 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/00174328

今日的課題を含む授業における授業形態による効果の違いと意識変容についての考察

― 家庭科実習に対して生徒が抱く嗜好とコロナ禍における本実践への印象との比較 ―

附属高等学校　桒原智美
東京大学（研究員）　大塚啓太
國學院大学　鈴木みゆき
附属高等学校（司書）　岡田和美
附属世田谷中学校（司書）　村上恭子
東京学芸大学　前田稔
附属特別支援学校　藤野加奈子
附属世田谷小学校　朝蔭恵美子
元世田谷こころ保育園（園長）　青山ひなよ
武漢大学　郭詩抬
東京学芸大学　杉森伸吉

目　　次

1．1．研究の背景（意義と目的）…… 38

1．2．研究の内容と計画 …… 38

1．3．研究計画の履行状況 …… 39

2．1．授業実践 …… 40

2．2．学校図書館の視点からの今年度（2021年度）の授業実践の流れ …… 41

3．家庭科実習に対して生徒が抱く嗜好とコロナ禍における本実践への印象との比較 …… 41

4．今後の課題と予定 …… 44

東京学芸大学附属学校　研究紀要　第 49 集

今日的課題を含む授業における授業形態による効果の違いと意識変容についての考察

― 家庭科実習に対して生徒が抱く嗜好とコロナ禍における本実践への印象との比較 ―

附属高等学校　桒原智美
東京大学（研究員）　大塚啓太
國學院大学　鈴木みゆき
附属高等学校（司書）　岡田和美
附属世田谷中学校（司書）　村上恭子
東京学芸大学　前田稔
附属特別支援学校　藤野加奈子
附属世田谷小学校　朝蔭恵美子
元世田谷こころ保育園（園長）　青山ひなよ
武漢大学　郭詩抬
東京学芸大学　杉森伸吉

１．１．研究の背景（意義と目的）

現在，学習において対面指導かICT活用かという二元論に陥ることなく，最適な組合せにより，個別最適化された学びと，社会とつながる協働的・探究的な学びの実現が必要と言われている。実社会で求められる能力も変わり続ける。新たなことを学び，挑戦する意欲を育てる授業を試みている。2019年度「災害を意識した授業を考える・指導案作り」授業のコロナ禍版を考える授業を実施した。2020年度は生徒によるICTを用いたまとめと発表を取り入れている。コロナ禍の中，家庭科の授業における実技・実習の可能性としての題材をカリキュラムに取り入れ，実践を行なうことが今日的課題を含む家庭科の授業になると考えている。また，その授業形態の効果と生徒の意識の変容を分析することが，他教科を含む他の場面でのカリキュラムを構築する一助となると考える。

１．２．研究の内容と計画

＜内容＞

今年度（2021年度）は，9月に予定していた学校図書館でのワールドカフェ方式の授業がコロナのため実施できなくなり，座学での「高齢者」についての学びとなった。学校図書館の資料を利用した教育実習生の授業となった。学校図書館と教育実習生のレファレンスリストについて，教育実習生の側からの分析も実施している。詳しくは2021年度日本教育大学協会全国大会にて桒原が口頭発表をしている。また，「先生のための授業に役立つ学校図書館活用データベース」Webサイトに「高校・高齢者授業」で2021年12月より，レファレンスリストと指導案がアップされている。このような環境の中にあった高校2年生を対象として調査研究を進めた。被服実習や学校図書館でのワールドカフェ方式の授業が急に中止となった生徒たちの意識を分析した。２ヶ月後，被服実習は実施できたが，ワールドカフェ方式の授業はできずに年度を終了した。その，意識と思いを分析した。調理実習は昨年度，今年度共に学校での実施はできず，家庭での実施となっている。

授業形態として一斉授業方式とワールドカフェ方式の授業への取り組み方と児童・生徒の意識の違いおよび授業効果についての活動観察とアンケート分析は，2018年度は東京学芸大学図書館運営委員会の文部科学省助成授業報告会（2019年12月22日東京学芸大学）において報告。「先生のための授業に役立つ学校図書館活用データ

ベース」Webサイトとリンクさせながら授業実施をした。1年次の実践は日本環境教育学会2019年5月発行のテキストにワールドカフェ方式として掲載。2年次は，情報をどのように与えていくのが効果的な授業になるのか，学校図書館の本・資料提供を活用し，学校図書館での実施を授業に取り入れ，今日的課題でもある「読書活動」をより積極的に取り入れた授業を実施。アンケート分析で「21世紀に必要とされる次世代型能力の学び」の要素を探った。

＜方法・年次計画＞

2年次は，情報をどのように与えていくのが効果的な授業になるかを，高校を中心に実践し学校図書館からの本・資料提供を利活用したワールドカフェ方式の授業を実施した。その後，高校生が自分たちで授業案を考える流れとした。具体的には，今日的課題でもある「深く考える，自分に戻して考える」ことを積極的に取り入れた授業を実施し，アンケートを実施。「21世紀に必要とされる次世代型能力の学び」への関連性のある要素を探った。アンケートと活動観察を実施。関連授業について2019年10月日本教育大学協会研究大会（岡山大学）において桒原・前田・岡田（村上）口頭発表。2020年10月日本教育大学協会研究大会（四国大会）において桒原リモート発表，2019年8月日本環境教育学会全国大会（山梨県）で関連研究を桒原が口頭発表。3年次はコロナ禍における「食」に意識を向け①コロナ以前②ワクチンのない今と休業中を含めた現在③今後の予想や希望，をタイムラインの視点で考え，生徒が指導案を作成し，指導案を紹介する1分間のパワーポイント動画を作成，ワールドカフェの精神である「否定しない・否定されない」ことを意識して発表し，動画を見合った。

今年度は，数日前に学校図書館でのワールドカフェ方式の授業が急に中止となった生徒たちの意識を分析した。

前回の研究の3年次は，1・2年次の結果を踏まえて，研究の2年次に高校で実施した授業では，高校生が指導案を作成した。指導案を基に保育園で園児に向けての授業を実施する予定であったが，コロナ禍，緊急事態宣言となり，生徒の移動が不可能になってしまった。2020年度は本研究の流れをくむ授業実践の中で「省エネ行動を実践する」というSDGsを題材とした消費生活に焦点をあてた行動を実際に生徒に実践させ，環境を守りたいと能動的に感じるという効果や生徒の意識変容の喚起があるかを検討した。消費生活の観点からは，2020年度日本消費者教育学会全国大会において「消費生活に焦点を当てたSDGs行動と生徒の意識の一考察―高校生におけるエネルギー消費の視点からー」を桒原が発表。日本消費者教育学会「消費者教育」第41冊（2021年9月）研究ノートとして掲載。

１．３．研究計画の履行状況

申請は2018年度が初年度であるが，2017年12月に4時間扱いの中学1年選択授業で学校図書館と家庭科室において実施している。授業「ワールドカフェで考えよう！」小学生の「生活科」や中学生での「総合的な学習の時間」へのアレンジの可能も見えた。自ら情報を選択し，自分自身の学習を深めていく「自分との対話」を授業の中でも深めていくことのできる題材として2018年度は「中山間地域」，2019年度は「災害を意識した指導案作りの授業」を実施。2019年度は対象を①幼児②小学生③中学生④高校生⑤一般，という5つのグループに分け，発達段階を意識しながら，その対象に向けて「災害を意識した授業」を生徒自らが考え，実際の授業や活動に繋げた。2020年度は「誰かに伝えるためには，自分自身がより深い知識や技能が必要であることを自覚し，学習を深める力と情報を与える。」ことを意識して，自分で授業対象の年齢を設定する思考力や相手に伝えていく力やパワーポイントで音声を入力して発表動画を作る発信力を育てる授業を実施した。

２．１．授業実践

昨年度（2020年度）の授業実践の流れ本授業実践はコロナ禍の影響で対面形式の調理実習が困難になった事を受け計画されたものである。そんな中でも，生徒の授業態度を引き出す工夫としてワールドカフェ方式を採用したことが本授業実践の特色である。ワールドカフェ方式は昨年度の実践でも採用しているが（杉森ら 2020），本授業実践はワールドカフェ方式を対面では無い場面で取り入れようと試みた例として区別できるだろう。昨年度の実践は自由であらゆる意見を受け入れる雰囲気を用意することで生徒の議論を活性化するという既往研究（e.g.，和田ら 2012）と共通する形で取り入れられた実践であったが，本授業実践は“否定されない”ことを生徒に意識してもらう事で，直接的に議論を交わすことは出来なくとも意見を積極的に発言しようという動機づけを狙った事が見て取れる。

そのような背景を持つ授業実践である為，その中で採用したワールドカフェ方式，特に“否定されない”という事を生徒に意識づける工夫がどのように受け取られたかを確認しておくことには意義がある。対面では無く，聞き手を想定しなければならない状況でも“否定されない”ことが生徒に確実に印象付けられ，それがどのような形で生徒に受け取られたかを確認する「SDGs と非常事態下の食事―コロナ禍，SDGs を意識した食の授業を考える―」を2020年度実施している。以下その概略である。

（1）単元計画　　対象：高校2年生（41名×6クラス）

・コロナ禍における食に意識を向け①コロナ以前②ワクチンのない今と休業中を含めた現在③今後の予想や希望，をタイムラインの視点で考えよう。（1時間目の1）

・評価の観点を意識して，どのような授業にするか考えよう。（1時間目の2）

・発表を聞き，情報を共有してより深く考えよう。（2時間目）

・音声入りの発表動画を作ろう。（3時間目）

・授業の流れの発表を聞き，模擬授業に繋げよう。（4時間目）

・ICT を取り入れた，コロナ禍における授業実施について考えよう。（5時間目）

（2）単元の目標　自分が伝えたいことが見つけられ，発達段階により，どのような内容を取り上げることが授業学習に適するのかを考えることができる。また，指導案を考えようと努力することができる。自分が大切だと考えることを，正しく表現し，伝えることができる。

（3）生徒たちの実態および本単元に至るまでの学習

緊急事態宣言のもと，学校での調理実習の実施もなくなり例年実施している調理メニューをそれぞれの家庭で必要に応じて材料をアレンジして実施。コロナ禍における SDGs の授業のあり方を実技指導授業とともに実践し，消費生活における SDGs に関わる行動と設定を Google フォームで課題を配信し，家庭での実践とした。（省エネ行動と省エネ設定）次に調理実習が学校において行えない中，課題として昨年度実施の一食分の調理実習を家庭で行い（和食，中華，洋食の3回実施），コロナ禍において変更した食材を Google フォームで回答している。2020年は6月はじめより，分散登校となったため，1学期のスタートは密を避けるために20人ずつの体制で，被服実習の基礎縫いで巾着袋製作，車椅子実習，高齢者，共生社会，エプロン製作を実施した。今までは災害や非常事態は「仮に」「もしも」の話と受け止める生徒が多くいたが，身近な自分ごとと捉えていた。食材内容では特にコロナ禍なので，変えたもの「魚」→「鶏肉」理由：生が揃わなかった，冷凍したものがあった，買いに行けなかった，などの回答が見られた。

2019年度のアンケートは2017年9月環境教育学会発表（桒原・大塚）の「学校教育における体験的総合学習の考察」～学習観尺度を用いた授業実践評価～をもとに作成し，2020年度は2019年度のアンケート結果をふまえて授業実施後全員に実施した。

２．２．学校図書館の視点からの今年度（2021年度）の授業実践の流れ

「教育実習生のための授業に役立つ情報と学校図書館」を意識して実践をした。高齢者についてコロナ禍2年目の今年度も教育実習生を200名近く受け入れる事となった。今年度の教育実習生への図書館オリエンテーションは東京学芸大学へ向けてのYouTube配信とした。毎年，対面で行なっていた実習指導を画面越しに行うことから，以前は情報の発信を変えねばならない現状が始まった。

今年度の実習生の授業テーマは「高齢者」である。高齢者学習は以前から他教科でも取り上げられるテーマの一つである。文部科学省や厚生労働省から団塊の世代による2023年からの高齢者問題が指摘されて，学習テーマとして高校でも度々学習課題として扱っている。今回，授業者からの聞き取り調査で「ノーマライゼーション」を意識した学習としたいとの意向をうけた。以前の高齢者支援は施設の確保や入院看護の必要性を掲げたものが多かったが，近年では，在宅医療や在宅看護の充実を目標とする意識が高くなってきている。その点を踏まえて教育実習生には資料の提供を心がけた。東京学芸大学の「先生のための授業に役立つ学校図書館データベース」は教員の授業をサポートするために設立したサイトである。今回は司書のサポートのもと，このデーダベースを実習生に作成してもらい授業の狙いや生徒への資料の提供を意識づけたいと考え，授業を充実させるために最初にブックリストの作成を依頼した。選書基準は授業者である自分が活用した資料，学習を深めるために生徒に紹介したい資料の両面を考えてもらった。出来上がったブックリストから実習生の授業者としての視点や日頃からどのくらい研究資料を読み込んでいるか，資料へのアンテナの張り方の差異などが読み取ることができ，彼らにどのような資料支援が必要なのかが見て取れたことが収穫としてあげられる。ともすると短い実習期間において，一方的な情報の提供に陥りがちな状態がブックリスト作成により，情報の共有となったことの意味は大きい。今後の展開としては，実習期間中（2021年9月現在）のコロナの感染者数増加による大学からの「学校図書館を含む特別教室での教育実習の禁止」が解除され，実習生が作成したデータベースを図書館活用で実際に行い，検証してほしいと願っている。「図書館で授業ができなくて本当に残念でした」との言葉を残した実習生の努力を今後の実習に生かしていきたい。

３．家庭科実習に対して生徒が抱く嗜好とコロナ禍における本実践への印象との比較

2019年の本授業実践は，ワールドカフェ方式に着目しながら対面方式を取っていたが（杉森他 2020），2020年度からはコロナ禍の影響によって対面ではあっても相互対話しないことが前提の授業が展開されてきた（楽原他 2021）。生徒間の自由な意見交換の場を提供することに注力してきた経緯を持つ本実践だが，本実践もコロナ禍が継続している影響で，対面ではあっても相互対話しないことが前提の授業での実習や意見交換が制限される中で実践されたことになる。また，高校2年生，つまり，高校入学以来，従来のような制限のない対面式の家庭科実習を経験していない生徒を対象としている点が，本実践の特徴と言える。彼らは中学までの家庭科受講経験から家庭科の実習に対するイメージや高校家庭科実習に対する期待を抱きつつも，それを経験することが叶っていない状態で本実践を受けたことになる。この点に着目するならば，生徒が抱く家庭科の実践へのイメージと本実践を受けて抱いた印象との落差を把握しやすいタイミングだと考えられる。本実践は対面ではあっても相互対話しないことが前提の授業方式でもワールドカフェ方式や実習の利点を取り入れ，実習を経験することと類似した教育効果を引き出すよう努力されたものではあるが，生徒に対して調査してみなければそれが実現しているかは不明瞭である。また，本実践における生徒の中のイメージの落差が明確になれば，今後その落差を埋める工夫を検討する手がかりになる。その意味で，本実践において，生徒への本実践への印象を聞き出すことは意義があると考えられる。

そこで，本調査では生徒自身が家庭科の実習に抱く嗜好を聞き出し，これまでの経験からどのような好みがあるか把握した。それと同時に，本実践への感想や捉え方を質問し，それらの回答を比較することで，生徒の抱く

家庭科実習に対するイメージと本実践との落差を確認することを目的とした。また，生徒にはこれまで同様ワールドカフェ方式についての精神を伝えた点が特徴である。そのため，ワールドカフェ方式の実践に関する問いも設け，それに関する考察を行った。

方法　分析には，本実践を終えた後にGoogleフォームを介して提出された生徒のアンケートの回答を用いた。このアンケートは，Q1「家庭科の調理実習は座学よりも好きか」，Q2「家庭科の被服実習は座学よりも好きか」，Q3「班で話し合う家庭科のグループワークは座学より好きか」，Q4「ワールドカフェ方式のような否定しない自由な話し合いは好きか」，Q5「本授業実践についての率直な思い」，Q6「人から否定されないで自由に意見発表や話し合いが出来る場があることをどう思うか」という設問で構成された。Q1からQ4までは「5：好き」から「1：嫌い」の5段階評定で回答を求めた。Q5とQ6は自由記述で回答を求めた。分析方法は，1）Q1からQ4の回答者数を集計し，ケンドールの順位相関係数を確認，2）Q5とQ6の回答を形態素解析し，特徴的な単語（名詞，形容詞，形容動詞，副詞）を確認，3）Q1からQ4の回答とQ5の関連性を対応分析で確認した。これらの分析には統計解析ソフトR4.1.1及びKHCoder ver.3を使用した。

結果　53名の回答が得られた。Q1からQ4までの回答を表1に示した。どの設問でも嫌い（座学の方が好き）とする生徒は一定程度存在するが，過半数の生徒は5や4を選択しており，各種の実習を好きだと捉えていた。特に調理実習はほとんどの生徒が好きとしていることが特徴的だった。また，これら設問の相関係数を確認することにより，家庭科の実習に関する生徒の嗜好が対応しているかを確認した（表2）。Q1とQ2，Q3の回答間には正の相関があり，例えば調理実習が好きなら被服実習やグループワークも好きと捉えている生徒が多いことが示された。しかし，Q4と他の実習には相関がなく，ワールドカフェ方式が好きな生徒と調理実習や被服実習が好きな生徒は必ずしも一致しないことが示された。

表1　生徒の家庭科の実践に関する嗜好（*N*=53）

選択肢	Q1 調理実習	（%）	Q2 被服実習	（%）	Q3 グループワーク	（%）	Q4 ワールドカフェ方式	（%）
1	2	(3.8)	6	(11.3)	5	(9.4)	4	(7.5)
2	1	(1.9)	4	(7.5)	9	(17.0)	4	(7.5)
3	5	(9.4)	8	(15.1)	12	(22.6)	15	(28.3)
4	11	(20.8)	18	(34.0)	14	(26.4)	19	(35.8)
5	34	(64.2)	17	(32.1)	13	(24.5)	11	(20.8)

※回答の選択肢は「1：嫌い」、「5:好き」を基準とし、回答者にはどちらに近い印象を持っているか近い数字を回答するよう求めた。

次にQ5とQ6の形態素解析の結果を確認した。Q5では190種500語が検出されたが，167種は3回以下しか記述されていないため，後の分析では除外した。特徴的な語を確認すると，最頻出語は「実習（48回）」，その他は「調理（23回）」，「学校（14回）」，「できる（12回）」などであった。Q6では184種535語が検出された。3回以下しか記述されていない語が161種あり，それらは分析では除外した。特徴的な語は，「思う（56回）」，そこから「する（35回）」，「良い（26回）」，「否定（23回）」，「意見（19回）」等が続いた。また，家庭科の実習それぞれを好き或いは嫌いとする生徒がQ5でどう回答したのか，回答間の対応関係を確認する為にQ1からQ4とQ5の形態素との対応分析を行った（図1，図2，図3，図4）。これらの図は，選択肢番号（1 ～ 5）の近くに布置された単語ほど，その選択肢を回答した生徒が特徴的に使用した単語であることを表している。

表２　家庭科の嗜好に関する設問の相関係数

	Q1 調理実習	Q2 被服実習	Q3 グループワーク	Q4 ワールドカフェ方式
Q1 調理実習	-			
Q2 被服実習	0.593	-		
Q3 グループワーク	0.454	0.565	-	
Q4 ワールドカフェ方式	0.177	0.068	0.112	-

※表中の数字が0.4以上ならば設問間に相関あり、0.2以上ならば弱い相関あり、と判断した。

考察　本稿で詳細な考察をする余裕はないが，結果をまとめると，相関係数（表2）から調理実習・被服実習・グループワークとワールドカフェ方式を分けて考察する必要があると考えられる。特に調理実習と被服実習が好きな生徒は「実習できない（「実習」＋「できる」＋「ない」）」不満をQ5で記述している傾向がある（図1，図2）。身体的に体験する実習を好む生徒にとって，本実践は不自由や制限を感じていたと考えられる。また，グループワークが好きな生徒も嫌いな生徒もコロナ禍で実践するのが大変だ（「コロナ」＋「やる」＋「大変」＋「思う」）という印象を抱いており，対面で交流することに制限があり不満，或いは，交流しないよう制限して欲しいという思いがあったことが伺えた。グループワークにおいても，本実践に制限があった点が生徒に強く印象付いたと考えられる。これらの実習を好む生徒に対しては，制限がない・少ないと感じさせる状況を整えてあげることが次年度の課題と言える。例えば，班で実習できる回数を確保する，家で実習させる場合はビデオ会議アプリなどで交流が可能な形で実践させる工夫をするなどが有用かもしれない。それに対して，ワールドカフェ方式が好きな生徒はコロナ禍の大変な状況の中で少ない回数でも実習ができた点をQ5で回答していたようである（図4）。また，Q6では意見を否定しない点が良い実践だと印象付いていると考えた。このことから，ワールドカフェ方式を好意的に捉える生徒は肯定的思考が高く，そのために制限がある中でもある程度前向きに本実践を捉えられたのかもしれない。ワールドカフェ方式を多くの生徒に経験させ，それを好意的に捉えられるような授業実践を進めることができれば，より多くの生徒に制限がある中での実践でも生徒の不満や不都合感を多少は解消できるかもしれない。本調査はそうしたワールドカフェ方式の利点をうかがい知る有用な知見と考えられる。

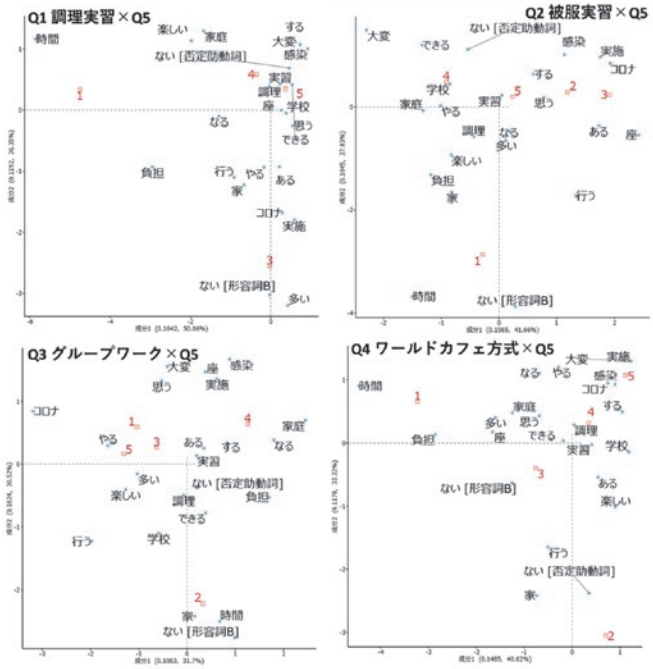

図１（左上）Q1とQ5の対応分析結果
図２（右上）Q2とQ5の対応分析結果
図３（左下）Q3とQ5の対応分析結果
図４（右下）Q4とQ5の対応分析結果
※図中の数字は選択肢への回答，単語は生徒が記述した単語を表す。

４．今後の課題と予定

2020年度は3年間のまとめを実施する計画で，１・２年次の結果を踏まえて，２年次に高校で実施した授業において高校生作成の指導案を基に保育園で園児に向けての授業を計画していたが，コロナ禍で生徒が移動しての活動が厳しい状況となり，2020年度はコロナ禍における生徒の学びを中心に実施している。2019年度，高校において班活動で実施した～防災関連授業の実践をふまえた授業形態の学び～としてのワールドカフェ方式を実施したが，2020年度は個人での指導案作成とした。しかし，情報交換時の発表や個人作成の1分間パワーポイント発表時にはワールドカフェ方式の基本精神ともいえる「否定しないこと・否定されないこと」を意識した授業とした。授業後アンケートを実施，分析し「ワールドカフェ方式を取り入れた事に対する生徒が抱いた印象の把握」をした。2021年度はワールドカフェ方式や実習が実施予定の数日前に急遽中止せざるを得なかったことを経験した生徒たちの意識を調査している。コロナ禍であることをマイナスに捉えなくても良いようにICT機器の活用を取り入れた実践を試みることが課題である。2020年度の実践にて新たに1分間パワーポイント動画を取り入れることの効果を確認できたことは今後の足掛かりにできるだろう。コロナ禍における授業としてのアクティブな学びの可能性と，児童・生徒の側だけでなく，大学生の学習教材となり得る形を精査していきたい。

ワールドカフェ方式を実際にやれば意見を積極的に引き出すことが意見の多様性にも貢献し，批判的な意見が無くとも多様な意見を受け取ることによって自らの意見を深める刺激になるかもしれない。そうした部分をコロナ禍の状況でも取り入れる工夫が必要になってくるのではないだろうか。しかし，自由記述より，“否定されない”ことに関するデメリットが浮き彫りになったことにも注目すべきである。“否定されない”ことは発言することへの萎縮を緩和し，自由に意見を引き出すことに貢献すると予想される。しかし，意見を交換することに関して言えば，批判的な意見から得られる，自らの意見を深める為の学習要素が得られ難い。“否定されない”ことを実際の議論の場ではなく，想定させるしか無かった本実践の中で，それが好印象と受け取れない生徒がいたことは今後の授業実践を考える上で有用な示唆となり，ワールドカフェ方式を好意的に捉えない生徒の意識分析をすることで，否定的な意識についての見解を深め，ひいては肯定的思考の高い生徒の理解が深まると考えられるのではないか。今後はその辺りを解明していきたい。

引用文献

杉森伸吉，鈴木みゆき，桒原智美，大塚啓太，齋藤大地，朝蔭恵美子，村上恭子，岡田和美，青山ひなよ．(2020)．今日的課題を含む授業における授業形態による効果の違いと意識変容についての考察：学校図書館活動を取り入れた防災関連授業の実践をふまえて．東京学芸大学附属学校研究紀要，(47)，47-53.

桒原智美，鈴木みゆき，大塚啓太，村上恭子，朝蔭恵美子，岡田和美，青山ひなよ，杉森伸吉．(2021)．今日的課題を含む授業における授業形態による効果の違いと意識変容についての考察：SDGsと非常事態下の食事：コロナ禍，SDGsを意識した食の授業を考える．東京学芸大学附属学校研究紀要，(48)，73-79.

参考文献

和田明人，音山若穂，上村裕樹，利根川智子，青木一則，君島昌志，駒野敦子，日野さく．(2012)．保育実習指導における対話と協同（その1）ワールド・カフェの試行と効果．東北福祉大学研究紀要，36，235-250.